

二次元性愛の抹消と抵抗可能性に関する社会学的研究

松浦, 優

<https://hdl.handle.net/2324/7182279>

出版情報 : Kyushu University, 2023, 博士 (人間環境学) , 課程博士
バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

氏 名 : 松浦優

論文名 : 二次元性愛の抹消と抵抗可能性に関する社会学的研究

区 分 : 甲

論文内容の要旨

本研究は、マンガやアニメなどのいわゆる「二次元」の性的創作物を愛好するセクシュアリティについて、社会学およびクィア・スタディーズの観点から考察するものである。具体的には、①上記のセクシュアリティがどのようにして人間へ性的に惹かれることや人間との性行為を欲望することとは異なる独自のセクシュアリティとして成立可能であるのか、②こうしたセクシュアリティがどのようにして周縁化されたり不可視化されたりするのか、③周縁化に対してどのように抵抗するのか、ということ考察した

第1章では、こうしたセクシュアリティの周縁化を捉えるための概念として、「対人性愛中心主義」を検討した。考察を通して、対人性愛中心主義はジュディス・バトラーの言う「〈字義どおり化〉という幻想」を構成する要素であり、性別二元論とあわせて異性愛規範の構成要素であるということ明らかにした。

第2章の前半では、マンガやアニメなどを指す「二次元」とはそもそも何なのかを、ポストヒューマン的パフォーマンス論と存在論的人類学に依拠しつつ、「オタク」論やマンガ表現論を批判的に検討する作業を通して明らかにした。二次元キャラクターとは、模倣的共感によって情報集積をアニメートすることを通してキャラクター化され、記号そのものが肉体であるようなものとして物質化されるキャラクターである。

これを踏まえたうえで、第2章の後半では、対人性愛に還元されない「二次元」へのセクシュアリティが存在可能であることと、そのようなセクシュアリティがいかに社会で不可視化されるのかということとを、ともに説明できる理論を提示した。まず、「二次元」への欲望を「人工環境と化した情報集積にもとづいて制作された人工物」への欲望として定式化した。次に、性別二元論と対人性愛中心主義を批判する理論を東浩紀による否定神学批判から引き出したうえで、現実社会における規則や規範の再生産を空転させる「アニメーション的な誤配による攪乱」を理論化した。最後に、こうした非対人性愛的なセクシュアリティが、抑圧や禁止とは異なる「ただ意味を失う」という仕方巧妙に抹消されることを論じた。

第3章では、前章で論じた抹消概念を、現象学的社会学に依拠することで精緻化した。まずシュッツに依拠しつつ、類型化されていないものが類型化されないままとなる現象を「非類型化」と概念化したうえで、抹消を「非類型化をとともなう周縁化」と定義した。次に、レリヴァンス体系の相応性の理念化と、主題的レリヴァンスの消滅に関するシュッツの記述から、抹消を維持するレリヴァンスの問題について論じた。そして抹消において「主観的意味連関の否定」が生じることと、その際の周縁化が間接的なものであるということ指摘した。

第4章では、抹消の具体的な事例として、架空のキャラクターへの性的惹かれを表す「フィクトセクシュアル」という言葉に関するウェブ投稿を分析した。フィクトセクシュアル当事者の投稿か

らは、性的マジョリティを名指す概念として「対人性愛」という造語を用いることで、性的表現を愛好する立場から強制的性愛や恋愛伴侶規範を批判するという言説が見られた。他方、フィクトセクシュアル・カテゴリーの正当性を疑問視する言説では、性的・恋愛的な対人関係に関わる生得的な「性的指向」ではないという理由が持ち出されていた。

第5章では、リスク社会論における道徳に関する考察をもとに、抹消という一見すると軽微に思われるかもしれないタイプの周縁化が、ミクロな日常的相互行為過程だけでなく、マクロなレベルでも生じうることを論じた。具体的には、二次元の未成年キャラクターを性的に描いた創作物を「児童ポルノ」とみなす法規制や非難を取り上げ、そこで対人性愛中心主義的な価値判断が暗に持ち込まれていることを明らかにした。

第6章では、これまでに論じたような抹消を把握・批判するためにどのような方針が必要となるかを考察した。まず、誤配をメディア論的に説明したうえで、対人性愛中心主義批判におけるアセクシュアルとの共鳴や、二次元コンテンツを「児童ポルノ」と扱おうとする法改正への対抗における「オタク」との共鳴について、アイデンティティ・ポリティクスとは異なる仕方での物質を介した「連帯」と位置づけた。抹消に対する抵抗は、モノと人の関係のなかから生じることもある。それゆえ、意味連関や「強い」主体をめぐる議論を、非意味的で物質的な連関へと開くことが重要だと論じた。

以上の研究は、ジェンダーとセクシュアリティの動的な関係を適切に捉えるための理論を提示するものである。また本研究は、これまで一般的に差別と呼ばれてきたものとは異なるタイプの周縁化があると指摘し、社会学的な差別研究を精緻化したと言える。最後に本研究は、能動的オーディエンス論では説明できないタイプの、物質のエイジェンシーを組み込んだ誤配の可能性を示唆したものである。